

特別企画：大学改革と図書館 (3)

「潤い」のある図書館づくり

- 大競争時代のマインド改革 -

岩 崎 司

“ちょっと一服”、熊本の民放ラジオ局に半世紀近くも続いている番組がある。まさに、番組名のとおり、仕事の合間にちょっと一服息抜きをする、そんなことを目的としている小さな番組だ。たかだか、二十数分間、ローカルで歯切れのいい閑話と何曲かの歌謡曲を流しているだけの番組が、どうして半世紀近くも続いているのか驚く。番組のつくりが、よほど地域性や県民の好みに合っているのだろうか。

かつて、二年ほど大学図書館に勤務して、図書館報の発刊に係わった。このとき、館報発行のコンセプトをどこに置くのか、随分と関係者で議論したことを思い出す。結論は、利用者が、ホッと一息入れたくなったとき思わず手に取って見たくなる、そんな“潤い”を持った館報を作ることを目指すこととした。図書館における“ちょっと一服”、そんな役割を担った館報は、八年経った今も発刊のときのコンセプトを大切にしながら、季節感と潤いに満ちた内容で刊行し続けられている。館報のコンセプトが、図書館の機能や利用者の好みに合ったらしい。

ところで、今、大学は、五十年の新制大学制度の歴史の中でも最大の危機に直面している。国立大学が、将来も国立大学で有り続けることができるのか、大学が、次の世紀においても大学として存在し続けることができるのかなど、深刻な課題が論議の焦点だ。

この数年、本学においても、様々な課題に沿って改革が推進されてきた。これらの改革は、大学院、学部、学科、講座、事務組織などの、大学の枠組み、ハードに係わる改革と、教育システム、研究システム、事務処理システムなどの大学の運営、ソフトに係わるものを軸としていた。大学のハードとソフトを、時代の変化や社会の要請に沿ってリニューアルしていく、これが改革のコンセプトとなっていた。

現在も、国立大学への改革の要請は、厳しさを一層加えて引き続いている。社会は、大学に何を求めているのか、大学人として悩むことが多い。ひょっとすると、大学人の意識そのものに疑問を投げかけているのではないかとそんな考えもしてみたくなる。そうだとしたら、大学の本来の使命である教育に対する情熱や、考え方、気持ち、姿勢、行動などの大学人のマインドの建て直し、その辺りに改革を要請することの原点があるよう

な気がしてならない。大学人が、大学本来の使命と自らが果たすべき役割を見失っていたとしたら、国民全体の奉仕者である国家公務員としての自覚が甘くなっていたとしたら。大学人の、そんなマインドについての真摯な反省を社会が求めているのではないかと思ったりする。改革が、仏作って魂入れず、こんな結果にならないためにも。

ここ数年、私立大学の多くは、二十一世紀は国立大学との大競争の時代と考えて大学改革を進めてきたと言う。一人でも多くの学生を確保することができるような大学づくり、それが私立大学改革のコンセプトだとか。リニューアルされた私立大学には、大学の使命や理念の原点に立ち返った大学像が多かったり、学生の期待に応ようとする懸命な意気込みが感じられたりする。大学の大競争の時代への備えでは、国立大学はそのスタートから遅れをとってしまった感じがする。グローバルな視座での大学の大競争、最後に優劣を決めるのは大学人の資質と目的意識の高さの違いだと言われる。国立大学の独立行政法人化、設置形態の論議の落ち着いた先も見えてきた。例え、大学の設置形態が変わっても、大競争に打ち勝って、せめて、次の世紀も大学として存在し続けるために、大学人として自らのマインドの改革と取り組むことが必要だ。

新しい図書館の建設、電子図書館の機能の整備などなど、大学図書館としての改革の要素は少なくない。図書館が、これらへの取組を、強化して早期に実現させていく、重要なことだが大学改革の目線から考えたとき、ただそれだけでは十分ではない。近年、とかく無機質化していると言われる大学にあって、“ちょっと一服”そんな機能と感性を備えた施設も欲しくなる。

利用者に気持ちのゆとりをも提供する、大学で、こんな役割を担えるのは図書館において他にはない。必要な情報を提供する傍ら、心の潤いと安らぎをも提供していく、そんな利用者のための図書館づくり、図書館に目指して貰いたい課題の一つだ。利用者が、“ちょっと一服”できる図書館づくり、館員のマインドこそが支えであると信じて疑わない。マインドの改革、言うは易く行うは難い課題ではある。

(いわさき つかさ 熊本大学事務局長)